

園番号 814

令和6年度 奈良市立京西保育園 研究実践概要

園長名 近藤美子
全園児数 121名

1. 研究主題「おもしろそう やってみよう またしたい環境づくり」
～主体的にいきいきと遊ぶ子どもをめざして～

2. 研究年度 2年度

3. 研究主題設定理由

初年度は主体的に遊ぶ子どもを育成するために、子どもが興味をもつ環境構成と、保育者の援助に視点をあて、子どもの心の動きに寄り添った関わりと、遊びをより展開させるための環境の再構築の必要性について明らかにした。

今年度は、遊びの中での子どもの心の部分にさらに深く視点をあて、子どもが何に興味をもっているのか、何を楽しんでいるのか、などの心が動く瞬間を捉え、その心の動きを支えていくためにはどのような保育者の関わりと、環境構成が必要であるのかを探り、主体的にいきいきと遊ぶ子どもの育成に繋げていくことができるようこの主題を設定した。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

- ・いきいきと生活する子どもの姿をよみとり、子どもが主体的に遊べるよう、物的環境や人的環境を整えていく。
- ・日々の保育実践を振り返り、事例検証を通して子どもの視点に立ち、心の動きや姿を捉える視点を明確にする。

②研究の重点

- ・子どもが主体的に「おもしろそう、やってみよう、またしたい」と考え、遊びこむことができるような環境構成について考える。
- ・日々の保育実践を振り返り、子どもが、どのような場面で心が動き、主体的に遊ぶ姿に繋がっているのか、保育者間で考察する。
- ・エピソード記録について、保護者とも共有できるものにするために内容、発信方法等について考える。

③活動の方法

- ・月ごとにエピソード記録を作成し、園内のカリキュラム会議にて各年齢のエピソードを基に、「子どもの心が動く瞬間」と「興味や関心をもって遊ぶことができる環境構成」について討議し、共通理解を図る。また、子どもの心が動く瞬間に、「子どもは何に興味をもっているのか」「何を楽しんでいるのか」「何に心を動かしていたか」等の視点から、子どもの心の動きを捉える事で、心の動きを考察し、環境（人的環境、物的環境）との繋がりや要因を探る。
- ・子どもの姿の振り返りの中から、幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿につながる「子どもの経験」を明確にする。

エピソード1 0歳児11月 「上まで登れたよ」

歩行ができるようになり、園庭に出ると目に入ったものや、気になる場所に向かって歩き、探索活動を楽しむ姿が見られるようになる。室内に、トンネル、スロープ、階段、マット、すべり台

などで体を使った遊びの場を用意すると登ったり、降りたり、跨いだりと体のさまざまな部分を使って遊ぶ姿が見られた。ある日A児は園庭に出ると、築山を見上げて自ら1歩、2歩と登り始める。緩やかな傾斜にバランスを崩しそうになると手をついて体を支え、四つ這いで登り始めた。上まで登ると嬉しそうな表情で保育者の顔を見ていた。

〈考察〉

日々の保育の中で子どもの発達に合わせた遊びの環境を用意し、子どもが体を動かして遊ぶ経験を重ねてきたことで、子どもの体のさまざまな力と体幹の育ちを支え、子どもが自らやってみようとする前向きな気持ちに繋がっていた。そして、子どもが自分でできた喜びを、保育者が言葉や身振りで受け止め、温かな応答的関わりのなかで、子どもがより安心して遊びに向かう姿へと繋がっている。

エピソード2 1歳児 8月 「新聞紙びりびり楽しいね」

保育者が、新聞紙に穴を開けたり、壁や床に貼ったりして用意しておく、子ども達がそれを見つけて指でつまんだり、両手で破ったり、引っ張ったり、ちぎったりして遊び始めた。子ども達はしばらく新聞に思いきり関わりながら、感触を楽しみ遊んでいた。今度は保育者がさらに細かくちぎった新聞紙を用意する。A児は両手いっぱい新聞紙を持ち、高く上げて手を放すとバサッとばら撒かれた新聞紙の上に寝転んだ。保育者が寝転んでいるA児に新聞紙をかけるとフワフワする感触を全身で楽しんでいた。その後はすべり台を用意し、滑った着地のところに新聞紙の池をつくると池の中に滑り降りることを繰り返し楽しんでいた。

〈考察〉

子どもの遊びの姿に合わせて、細かくちぎった新聞紙を用意したり、滑り台を出したりと、遊びの環境を工夫することで遊びが変化していった。保育者も子どもと一緒に新聞紙を集めて大胆に広げて投げたり、全身で遊びの楽しさを表現したりすることで、子どもの楽しさや嬉しい気持ちを受け止め、楽しい、もっとやってみたいなどの、子どもの遊びへの意欲をより引き出すことができた。また、新聞紙をなかなかちぎれない子どもには、保育者が側で一緒にちぎったり、そっと手を添えてちぎり方を伝えたりすることで、安心して自分もやってみようと思う姿に繋がっていった。

エピソード3 2歳児 10月 「「よーいどんしよう」

幼児クラスの運動会の練習を見たことがきっかけとなり「したい！」とかけっこが始まった。園庭に出るとA児が保育者に「よーいどんしよう」と声かけてきた。A児が「お兄ちゃんがもっていた丸いのは？」と言うと保育者が「丸いの？」と聞き返し、A児が「よーいどんする時の」と言う。保育者は、5歳児がリレーの時に使っているバトンの事だと気づき、バトンを用意するとB児が「カッコいいな」C児も「僕もほしい」と言い、数名が「よーいどんしたい」と集まってきた。A児が「これ持ったら速く走れるねんで」と言う。B児が「おっしゃ〜」と嬉しそうに声を出した。保育者が地面に線を引きみんなで並ぶと、スタートの合図を期待感いっぱいに待っている。「よーいどん」の合図で一斉に走り出すと、周りの子ども達は「がんばれー」の掛け声で応援が始まり、バトンを交代しながらしばらくかけっこを楽しんだ。

〈考察〉

幼児クラスの運動会の練習を近くで見せてもらったことがきっかけとなり、子どもの「やってみよう」気持ちが芽生えた。初めはみんなで園庭の端から端までを走るだけの遊びであったが、5歳児のリレーを見たことで、「自分ももっと速く走りたい」気持ちがうまれ、「速く走るにはどうすればいいんだろう」と考える姿も見られた。A児のバトンを持つことで速く走れるかもと、思いついたアイデアが他児にも広がり、かけっこの遊びを繰り返し継続して楽しむ姿に繋がっていった。異年齢児の頑張る姿を見たことが刺激となり、憧れの気持ちから「同じようにやってみよう」という遊びへの意欲をひきだし自分の思いを言葉で伝えながら遊ぶ喜びや、友達と一緒に体をおもいきり使って遊ぶ面白さも感じる事ができた。

エピソード4 3歳児 8月 「色が変わったよ」

赤、青、黄色、緑の4色を用意し、テラスで色水遊びが始まった。ペットボトルから自分のカップやコップに好きな色を選び、移し替えながら思い思いの色をつくっている。A児はカップに赤色を入れ、次に黄色を入れると「色が変わった」「すごい！オレンジ色になったよ」と嬉しそうな表情で保育者に伝えた。近くにいたB児もオレンジ色をつくっていたが、「ちょっと色が違うね」と色の濃さの違いを不思議そうな顔で見つめている。数日後「今日は茶色をつくる」「ぶどうジュースがいいな」などと自分がつくりたい色を決めて遊びを楽しんでいた。

〈考察〉

十分な量の色水を用意することで沢山の組み合わせの色をつくることができた。また、子どもが扱いやすい大きさのペットボトルを用意したことで、入れる量を調整し、色水の濃さの変化を楽しむ姿が見られた。机を広く用意したことは、子ども同士が互いに遊んでいる姿を見ることができ、同じものをつくってみたい気持ちや、違う色もつくってみたい思いをもって、いろいろな色を混ぜて試そうとする姿につながっていった。保育者は側で子どもの遊ぶ姿に合わせて「色がかわったね」「おもしろいね」「不思議だね」と声をかけながら遊びの面白さや満足感に共感し、答えにつながるような問いかけの工夫や関わりで支えていくことで、子どもが自ら考えたり、満足いくまで試したりしながら継続して遊びを楽しむ姿につながった。

エピソード5 4歳児 10月 「リュックにしたい」

空き箱にスズランテープをくっつけていたA児は、リュックサックをつくりたい様子でスズランテープを貼っては背負い、貼り直しては背負いを繰り返しているが左右の長さが合わず、バランス良く背負うことができず、上手くいかない。2本のスズランテープの長さやつける位置に悩んでいる様子が見られたので保育者が「どうしたいの？」と声をかけると「リュックにしたいのだけど上手くできない」とこたえた。隣ではB児が自分でつくったリュックを背負っていたので、保育者が「Bちゃんに聞いてみる？」と声をかけた。B児は自分のつくったリュックを見せ「ここここにテープをつけるねん、2本のテープは同じくらいの長さやで」と教えてくれる。A児は、保育者と一緒に同じ長さのスズランテープを2本切り、B児のリュックと同じように箱の位置に張り付けると上手く背負うことができた。

〈考察〉

初めの頃は箱と箱をテープで貼り合わせることを楽しむ姿が見られていたが、遊びを繰り返すうちに、保育者や友達がつくる姿を見て真似てつくるようになり、どこにテープを貼ると外れにくいかを考えるようになった。そこから「〇〇をつくりたい」「これをつくるには〇〇がほしい」とイメージしたものをつくり上げるために様々な素材を求める姿が見られ、保育者はその思いを受け止め、素材の量や種類を豊富にし環境を整えていくことで、子どもが使いたい物を自ら選択し、イメージしたものに近づけるために工夫する姿が見られるようになってきている。

エピソード6 5歳児 11月 「どうやってつくったの？」

自由選択活動の時間になると「製作してもいい？」と製作活動を楽しむ子どもの姿が見られる。前日の遊びの続きをする子もいれば、友達と一緒に1つの作品を協力してつくって遊んだり、毎日自分のつくりたいものを考えてつくり、嬉しそうにもって帰ったりする姿も見られるA児は「それかわいい、どうやってつくったの？」とB児のつくったものに興味をもって声をかけるとB児が自分の作品を紹介し「一緒につくろうか」「もっとここはこうしよう」などと互いにアイデアを出し合いながら遊ぶ姿が見られた。また、自分では難しいと考えたC児は「ここを切りたいのだけど、難しいから切ってください」と保育者に具体的に自分がして欲しい事を伝え、保育者に手伝ってもらうことでなんとかつくりあげようとする姿も見られた。一人一人が、様々な素材に触れながらつくりたいイメージを広げ、イメージしたものを形に表現しようと自分なりに考えたり、工夫したり試行錯誤を繰り返しながら遊びこむ姿が見られた。

〈考察〉

子どものつくりたい気持ちを受け止め、様々な素材を豊富に用意したことで、子どもが自分

なりに考えたり、試したり、友達と相談したり協力したりしながら主体的に遊びをすすめていく姿が沢山見られた。保育者は、子どものつくった作品や製作過程の中で工夫したり、考えたりしている姿を認め、イメージを形にしようとする姿を支えていくことで、つくる喜びと、遊びの満足感や、充実感を味わいながら「もっとやってみよう」「つぎはこうしてみよう」と思う意欲にも繋がっていった。友達の姿に気づき、困っている時には「どうしたの?」と声をかけたり、互いに教え合ったりしながら遊ぶことで刺激を受け合い、互いの良さを認め合い関わりが深まっている。様々な素材に触れながら試したり工夫したりする経験の積み重ねが、子どものもつイメージを広げ、アイデアのひらめきへとつながっている。

5. 研究の成果

- ・月に1回エピソードシートの作成を行い、保育や子どもの姿の振り返りを続けてきた。エピソードを通して、子どもの心の部分に視点をおき「子どもが何を楽しんでいたのか」「何に興味をもっているのか」等を子どもの目線に立って考えたり、保育者との関わりについて意識したりすることで、様々な視点から子どもの姿を捉え、子ども理解を深めてきた。また、子どもの環境との関わりとその意味について考えることで、環境や保育者の援助の在り方について見直し、それを活かした指導計画を立てることによって、実践の質の向上につながっていると考える。

- ・0, 1, 2歳児は身近な環境の中で、身近なものに親しみ、様々な感触を味わったり、体のいろいろな感覚を刺激したりしながら遊ぶことを楽しんでいた。年齢が低くなれば低くなるほど、単純な遊びが多くなり、何度も繰り返し遊ぶことを楽しんでいる。保育者は「子どもがなぜ繰り返し楽しむのか」「どこが子どものおもしろさに繋がっているのか」を意識し見る事で、子どもの心の動きを受け止めた関わりや環境構築を行った。このような実践の積み重ねは、子どもの遊びにどのような意味があるのかを捉える力が磨かれ、保育者の資質向上に繋がった。

- ・3, 4, 5歳児は遊びの中で周囲の環境と関わり、様々なものやことに興味や好奇心を抱いて遊ぶ中で、そのものやことの特性や法則性に気づいたり、自分なりに考えたりしている姿が見られた。また、気づいたことを他児に伝えながら、相手の考えに触れることで新しい考えを生み出す喜びや楽しさも感じている。子どもが「何に興味をもっているのか」「何に気づいたのか」「もっとやってみたい気持ちはどこからくるのか」等の心の内面の動きに焦点を当て、子どもの姿を省察することで、発達に合わせた意図的なねらいをもった援助と、次の遊びに展開できるような環境の再構築を行うことが大切であると分かった。

- ・保育者は、幼児が身近な環境に関わりながら遊ぶ中で、いろいろなことが十分に試せる自由な時間と興味や関心を引き出し、遊びを誘発するような素材を見極めて準備することで、子どもが心を動かしながら、自ら環境に関わり主体的に遊びこむ姿へと繋がっていることを学んだ。また、実践にあたる保育者が十分にこのことを認識し取り組んでいく必要があると考える。

6. 今後の課題

- ・2年間の研究で子どもの遊びの姿から心の動きに視点を当て、それを支える環境との繋がりについて探ってきた。子どもの心の動きを捉えるためには、視点をもって持続的に保育を省察することと、子どもの心を多面的に理解することであると明らかになった。今後はこれらを重ねていく事と、遊びを連続的に捉える視点をもつことで、子どもの遊びの中での課題や、仲間関係の繋がりにについても明らかにしていきたい。

- ・保育者は子どもの気持ちに寄り添うだけではなく、発達に合わせた教育的見通しをもった環境構成を行うことで、子ども達一人一人が力を発揮し主体的に遊びこむ姿に繋がっていくことを意識し、今後も職員間で話し合ったり、多くの実践に触れたりしながら保育の質の向上と子ども理解を深めていきたい。

- ・エピソードシートの保護者との共有については、園での子どもの姿と、遊びを通した学びへの繋がりについて掲示をすることで伝えてきた。往還的な工夫等についてはまだまだ検討の必要があると考えており、今後の課題としたい。